

京都大学地理学談話会

会 報

第31号



2020

[目次]

寄稿

国連地名専門家グループについて……………	渡辺 浩平 (1993年修)	1
グローバル製造業での海外経験を通じて……………	山口 滋 (2005年卒)	3
島の神様に導かれて……………	壬生 友子 (2005年卒)	5
教育現場の変化とその対応～生徒のいない教室で思うこと～……………	煙山 哲史 (2007年卒)	8

秋季地理学談話会の報告 …… 11

〈OB交流会〉 講師：江崎 洋平 (2012年卒), 須藤 梢 (2013年卒)	
〈講演会〉	
「定説・通説を考える—近年の研究から—」 …… 出田 和久 (1976年卒)	12

研究室便り

〈総合博物館での地図資料等の利用について〉……………	17
〈外国人研究者～滞在された方～〉……………	17
〈第八回東アジア人文研究ワークショップ開催延期〉……………	18
〈画像アーカイブの公開～古地図と中国風俗人形～〉……………	18
〈地理学教室への寄贈図書～2019年度～〉……………	19
〈研究室の動静〉……………	21
〈新メンバーの自己紹介〉	
〈2019年度の実習旅行〉	
〈学部卒業生・院生等の進路〉	
〈院生の研究状況の報告〉	
〈学位の取得〉	
〈2020年度講義題目〉	

事務局から

〈地理学談話会2019年度会計報告〉……………	27
〈訃報〉……………	27
〈住所不明者についてお願い〉……………	27
〈オープンキャンパス：2019年度の報告と2020年度のお知らせ〉……………	29
〈2020年度秋季地理学談話会について〉……………	29
〈地理学談話会『会報』バックナンバーのリポジトリ掲載に関する お知らせとお願い〉……………	29

※表紙写真：中国農村模型（風俗人形）GE-272「四人擔ヒ籠」（満洲木彫人形）
（大正2年6月25日、買入、（番号81）、価格：75 銭）

寄稿

国連地名専門家グループについて

帝京大学

渡辺 浩平（1993年修）

国連にはさまざまな組織があり多くがア
クロニムで表記されますが、UNGEGN は
何の略かご存知でしょうか。United Nations
Group of Experts on Geographical Names「国
連地名専門家グループ」になります。国連
にはいくつも「専門家グループ」があり、
私の専門（都市廃棄物管理）に近い分野では
UN-GESAMP(Group of Experts on the
Scientific Aspect of Marine Environmental
Protection)というのがあり、海洋プラスチ
ック汚染に関して使い捨てプラスチック製
品の使用削減の提言などを出したりしてい
ます。各々、特定の事柄に関する世界中の
専門家が集まって、国連の名のもと加盟国
に各種提言を行うというものです。

UNGEGN は地名の標準化を目的として
おり、それは「公的機関による地名の表現
方法等についての規範の確立」を意味し、
具体的には地名を扱う公的機関が地名の承
認・命名・改名・呼称・表記の管理など統
合管理を行うことであるとされています。
国連経済社会委員会のもとに 1960 年に設
置され、国連統計部が事務局となっています。
設立の経緯はよく知らないのですが、
当時のアフリカ諸国の独立などの動きと無

関係ではないと思われます。

1967 年に第 1 回の国連地名標準化会議
が行われ、50 年後の第 11 回まで 5 年ごと
に行われました。専門家グループの総会
はこの地名標準化会議の際のほか、間の 5 年
の間に 2 度開催されてきました。近年開催
間隔が改められ、2 年に 1 度 UNGEGN 総
会が開かれ、その際に標準化会議も行うと
いう形になっています。直近では 2019 年 4
月 29 日～5 月 3 日にニューヨークの国連
本部で行われています。

地名標準化に関する決議等が標準化会議
において行われ、専門家グループの会合で
は取組や事例の報告、課題への勧告等を行
うという形になっています。構成メンバー
は各国が定員なく出せることになってい
て、前回はインドネシアの 20 人、韓国の 15
人が最大、欧米各国は 2 人ずつ程度、まっ
たく出席者のいない国もあり、公式発表で
70 カ国から 280 人が参加していました。
日本は外務省と国土地理院と大学研究者で
10 名の登録でした。全般的には、政府系
だと測地や地図作製当局の方が外交官より
も多く、研究者系では言語学者が地理学者
より少し多いといったところです。こうい
った立場も専門的背景も違った人々が一堂
に会して地名の原則について議論するとい
う、ちょっと妙な会議です。

UNGEGN は 24 の Division という言語や
地域による区分で構成されています(表)。
言語と地域なので重複する場合もあり、複
数の Division に所属する国もあります。日
本は韓国、北朝鮮とともに "Asia East
Division (other than China)" に属していま

表: UNGEGN の Division と Working Groups

Divisions
Africa Central
Africa East
Africa South
Africa West
Arabic
Asia East (other than China)
Asia Southeast
Asia Southwest
Baltic
Celtic
China
Dutch and German speaking
East Central and Southeast Europe
Eastern Europe, Northern and Central Asia
East Mediterranean
French speaking
India
Latin America
Norden
Pacific Southwest
Portuguese speaking
Romano-Hellenic
United Kingdom
USA/Canada

Working Groups
Country Names (廃止予定)
Geographical Names Data Management
Toponymic Terminology
Publicity and Funding
Romanization Systems
Training Courses in Toponymy
Evaluation and Implementation
Exonyms
Geographical Names as Cultural Heritage

す。Asia East Division の活動は低調ですが、East Central and Southeast Europe Division や Dutch and German Speaking Division など、頻繁に会合を開き活発に活動している Division もあります。Division とは別にトピックごとに 10 のワーキンググループがあり、こちらも総会での報告や標準化会議での決議の草案に向けて定期的に会合を持ち活動をしています。筆者はエキゾニム作業部会の主幹を務めています。

地名標準化会議では 1967 年以来、211

の決議 (resolutions) を発行してきました。

UNGEGN の運営関連で、Division や Working Group の創設、次回会議の開催や議題などを定めたものも多いですが、それら以外で特筆すべきものとしては、国家地名当局の設立、地名集 (gazetteer) の管理と公開、先住民族・少数民族の地名や伝統的な地名の尊重、商業的な地名の改変の不推奨、エキゾニム使用の削減、があげられます。なお、UNGEGN は原則・規範を取り扱う場であり、個別の地名についての議論はしないことになっています。

国家地名当局は国レベルでの地名標準化の主体であり、さまざまな形態で多くの国に設置されていますが、日本には存在しないと言わざるを得ません。詳しくは日本学術会議 (2019 年) の報告「地名標準化の現状と課題」を参照していただきたいですが、国土地理院は基本的に各地方自治体からの報告に基づいて地名を地図等に記載するだけであり、統一的な基準で新地名や地名改変の適否を示すことはどの段階でも行われていないからです。地名は社会と地理的事物との長年の関わりを反映した文化的遺産あり、防災等においても重要なものとして認識されるべきですが、地方自治体の合併、不動産開発やネーミングライツの売買などの際にないがしろにされている例が世界的にも多く見られます。

エキゾニムとは「地理的実体が存在する地域で使用されていない言語によって付与された地名であって、当該地域の言語による地名 (エンドニム) とは形の異なるもの」と定義されています。エキゾニムの削減決

議は、UNGEGN の発足当初の反植民地主義や"one feature, one name"のスローガンを実現しようとしたいさみ足、という感がなくありません。これを厳密に適用しようとすると、例えば"太平洋"はエンドニム(日本列島が接しているため)、“大西洋”はエキゾニムなので、太平洋は OK ですが、大西洋は削減対象ということになり、それも変な話です。“Japan”や“イギリス”など長年定着しているエキゾニムを改変するのも混乱を招くだけで受け入れられないように思われます。なお、人名の場合は自分が他人からどう呼ばれるかは本人の意思が最大限尊重されるべきだと考えられますが、地名は人名と違って、命名対象が存在する場所の言語コミュニティは他言語社会における名称に関しては権限を持たないということにも留意しておく必要があります。

各国とも多くのエキゾニムをかかえており、UNGEGN のなかでは最も活発に活動している作業部会なのですが、どういう方向性を今後持たせるのか悩ましいところです。現在は先住民族・少数民族の地名と広域の公用語の地名の併記が推奨されるなど、ひとつの名前に統一する必要はないという動きも出ています。「標準化」はプロセスについてはそれなりに合意があるものの、それがどのような状態を目指すものなのかということについては同床異夢な状態だと言えます。

UNGEGN のウェブサイト (<https://unstats.un.org/unsd/ungegn/>) には過去 60 年間のすべての報告や議事録が収録されています、また近年の会合に関しては、

全議事の録画が視聴できます。国連のこんなところでも地理学者が参画しているのだということに関心を持っていただければ幸いです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

グローバル製造業での 海外経験を通じて

住友電装株式会社
山口 滋 (2005年卒)

早いもので、私が地理学教室を卒業してから15年の歳月が経ちました。3年ほど前までは、在学中に在籍していたバドミントン部の行事で年に2回ほど大学に足を運んでいましたが、ここ数年は参加できず、今年こそはと準備をしていた矢先、新型コロナウイルス感染症の流行により行事が中止となり残念に思っていました。このような情勢の中、今回の執筆のお話をいただき、大学に関わる機会を得たことを嬉しく感じています。

私は現在、三重県四日市市に本社を置く、住友電装㈱の生産技術部門に勤務しており、自社製品を製造するための生産設備の設計に従事しています。今でこそ文系の学部からITエンジニアとして就職する人が増えてきましたが、それでも、私のような工場勤めの人は少数だと思います。私の場合は、在学中にGISに興味があり情報処理の資格を取得しており、卒業後約3年間の教

職を経てから転職し、現在に至ります。

住友電装という会社について簡単に紹介させていただきますと、主力製品の自動車用ワイヤーハーネスでは世界でも有数のシェアを持ち、約30カ国で20万人以上の従業員を抱えるグローバル企業です。

ワイヤーハーネスという言葉は耳慣れない方も多いと思いますが、電線をテープなどで結束し、自動車の車体形状にフィットするように加工した製品です。製造量の90%以上を海外に移管している環境であり、私も自身が開発した設備の使用方法的指導などで、主力工場が存在するフィリピンやベトナム等ASEAN諸国に、年に数回は出張する機会があります。

これらの国でのコミュニケーションは基本的には英語です。恥ずかしながら、在学中は語学の習得に力を入れていたとはいええない状態であり英語にも自信はありませんでした。それでも、何度も現地スタッフと片言でもやり取りを続けているうちに会話技術が向上し、いつの間にか会議でも通訳が必要なくなっていました。語学に関しては、やはり実践が一番大切だと実感しているところです。

出張中はホテルに滞在し日本食レストランに行くことも多いですが、昼食は工場の食堂で現地スタッフと同じメニュー、夕食も現地のレストランで取ることがあります。最初の頃は、出張の度にお腹を壊していましたが、段々と体が慣れるのか、今では特に体調の変化もなくなりました。個人的な好みですが、フィリピンは肉料理が中心で油っこいものが多く滞在が長期になる

と飽きてしまいましたが、ベトナムは薄味でヘルシーな料理が多く、楽しみながら過ごすことができます。



ベトナムの現地食堂で

ワイヤーハーネスの生産は、機械による自動化が困難で手作業が多く、労働集約的な要素がかなり大きい産業です。日本でも一昔前までは地方によっては代表的な内職のひとつで、電線を各家庭に配ってテープを巻きつけるなどの加工作業を委託することも行われていました。海外に多数の工場を展開する主要な理由も安価な労働力の確保にあります。例えば、ベトナムの農村地域などでは、一般的な作業員の人件費は時給に換算すると200円に満たないほどです。日本では考えられないほどの金額ですが、現地では現金収入の機会が非常に貴重であり、欠勤したりすることはほとんどありません。妊婦の方が出産当日まで勤務していたということも珍しくありません。

会社の工場展開が現地に雇用の創出をもたらしているというのは事実ですが、一方で、発展途上国の安価な労働力を利用し収益をあげることで世界システムの固定の一端を担っているという側面も否めない部分があります。この大きな流れの中では個人

の力は非常に微力に感じます。しかし、自分にできることは、経済的に厳しい環境でも目の前に仕事に真剣に取り組んでくれている作業員・スタッフに対して真摯に向き合い、彼らの仕事の質を上げる設備を設計し普及させていくことだと信じて、日々の業務に当たっています。

また、海外で業務を進めるには、現地の文化・スタイルを理解することも大切です。最近では日本でもLGBTといった言葉を目にするのは珍しくなくなりましたが、フィリピンの工場では、実際に同性のパートナーを連れているスタッフと会うこともよくあります。また、キリスト教徒が多数を占める国では、12月の街は日本では想像できないほどクリスマス一色で、工場の人も盛んにパーティーを開催したりします。円滑に業務を行うためにも相互理解が不可欠で、柔軟に対応できる能力が求められます。



12月のフィリピンのホテル

地理学教室は、研修旅行や卒業研究でのフィールドワークなどで多様な文化に触れる経験ができる環境です。最後になります

が、在学中の方は、日々の勉強に打ち込んでいただくことは勿論ですが、貴重な時間を活用して多様な価値観を尊重する姿勢(ダイバーシティ)を身に付けていただければと思います。社会に出て様々な人と共に仕事をする中で、このことを強く感じるようになりました。

それでは、地理学教室の今後のさらなるご発展を祈念しながら筆を置かせていただきます。

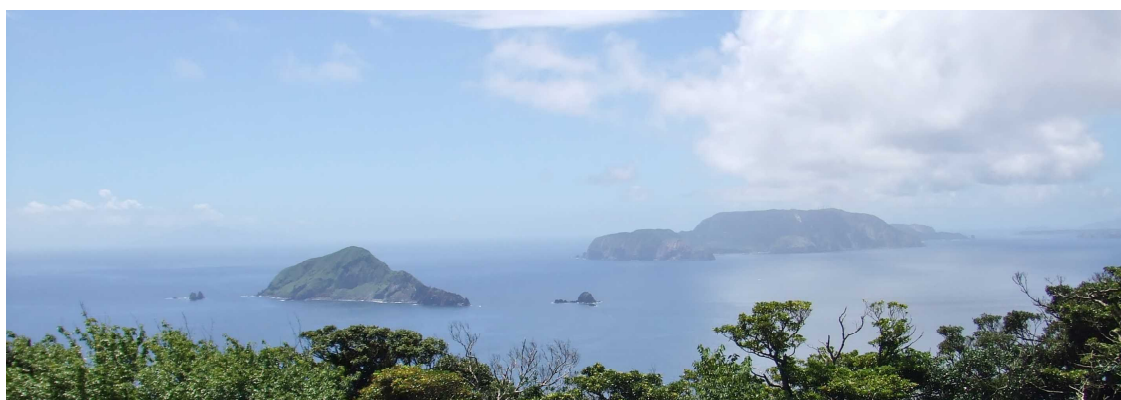
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

島の神様に導かれて

富賀神社（三宅島）

壬生（柳原）友子(2005年卒)

ホオオーウ ホオオーウ…今日も森の奥からカラスバトの声がして、子どもたちと耳を澄ます。私の住む伊豆諸島は、有史以来噴火を繰り返してきた島々。自然の力に畏怖と感謝の念を抱いた人々によって崇められてきた神々の居ます島である。中でも激しい噴火で知られる三宅島へ7年前に移住し、代々島を治め神様にお仕えしてきた壬生家へ嫁いで5年。昨秋、懐かしい気持ちで卒業証明書を頂き、國學院大学の神職養成講習会へ参加した。義父や夫を補佐し、次世代へ繋いでいく役目を覚悟するこの頃である。私たちが奉仕する富賀神社は、伊豆諸島の創世神話『三宅記』の主人公「三島大明神」をお祀りし、島内及び他



利島より島々を望む・・・うっすらと、三宅島も

の島々にはその御后や御子のお社が鎮座する。多くが延喜式内社であり、年に何度かの祭で夫が奉納している神楽にも謡われた神話の世界が、1000 年前から地図上にのこっている。御神輿は隔年で、御后神の社など島内5 地区に各々一泊しながら島をひと巡りする。古から伝わる神事芸能も東京都の文化財に指定されているが、噴火や近代化の中で行われなくなってしまった。宮司を 60 年務めてきた義父が夫婦で居住する、茅葺民家「島役所跡」の建築も存続が危うい。しかし、島だからこそのこされてきたであろう古の世界を構成するこれらの文化財は、島に在り続けるべきもの、日本の歴史にとっても重要なものであると感じ、昨年、保存活動の第一歩を踏み出した。将来的に「島役所跡」を活用して、民具の収集・展示、島に関する資料や研究情報の集約、文化的活動の発信など、島における文化に関するセンターを目指して活動し、私が学んできたことを社会へ還元したいという夢がある。

自然と近いいわゆる田舎にある、閉鎖的

に地形で区切られた集落での暮らしの中にこそこのこってきたものを、見出し伝える作業は重要である。日常の中にこそ、人が必要としている文化があって、土地ごとに様々である。その地で暮らした先人が作りあげてきたものが受け継がれ、後の人の財産となるからこそ、心身が豊かでいられる。「その土地にとってのあたりまえの暮らし」を知り、分析し、記していく努力が、継続して沢山の土地で行われたらどんなに良いことか…とりたてて珍しい習俗ではないと思われることも多いが、その中に小さな特別が隠されているかもしれないし、様々な



富賀神社の御神輿が、島役所跡の前をとって御笏神社で一泊する

習俗の総体は、その土地に暮らす人・育った人の世界観を形成し、力強い根となる。客観的な目線によって偏見など倫理的な問題もみえ、先人の苦しみもまた明らかとなり、現在と未来の私たちのよりよい在り方への議論を可能にする。これらは改めていうまでもないことばかりのようで、私は在学中、専門的に探究していくべきものなのかを悩んでいた。学会で発表するような新しい事柄ではなく、小さな集落の事象について自治体で扱うには予算や人材に期待ができず、全く別の職業の傍らでは十分な探究ができない…でも、とても大切な作業である。このジレンマに長い間苛まれていた。研究を続ける力は私にはなかったと省みつつ、文化財の保存活動や、近所のおばあちゃんからの民具収集、子どもとの散歩ついででの聞き取り、島の歴史について語り合う時、そして神職への学びのなかで…大学で勉強すること、京大で自由に聴き・考えたことの意義深さを改めて感じるようになった。地理学教室での卒論にて、京都大原盆地の祭などを調査し地誌的な記録を描こうとした時、気づきながらも達成できなかったことを、実践する場所に今たどり着いたのだと思う。

卒論執筆の中ではまた、大原という土地への感動と記憶と魅力に心奪われ、いつのまにか子どもの頃からの美術好きが再燃していた。土地に生きる人々のありさまを客観的に知り記していくとき、あるいはその土地の人自身が未来へ伝えていこうとするとき、必須とならざるを得ないのは、「感受性」と「表現（力）」である。まずは自

らが五感を張って心から理解しようと努め、伝えていく。ひとりではなく、その土地に展開する世界を共有する皆で、芸能や祭などを繰り返すことによって、形と想いを未来へのこしていく。ここに、心を動かすこと・心に残ること・惹きつけることが



三宅島に移住してすぐ、島の人の温かい笑顔に心動かされて制作したレリーフ

必要となり、それらを可能にするものの一つを、芸術が担っているのではないだろうか。そういった力を研鑽することは、人が、社会が、生き・発展していく中で常に行われてきた。この数か月、感染症対策として様々な活動が自粛される中、生活に必須なものは何かと考えさせられてきたが、芸術・学問・信仰などは、人が積極的に求めるばかりではなく、人を慰める機能をもっており、元来身近なものだ。それを示していくこともまた、学ばせてもらった者の使命とを感じる。

とはいえ島においては、移住者であり嫁の立場であることで、いっそう慎み深くあるべきと自らを戒めている。前近代的な感覚かと思われるかもしれないが、いつもど

こでも謙虚さと客観性を忘れないこと、「普通の生活」に色々な意味で敬意を払うこと—私が学問や美術を通じて学び、色々な職業を経験する中で培うことのできた感覚である。高校時代、カラスバトの研究をしている恩師が連れて行ってくれた伊豆大島に魅了され、同時に文化人類学や民俗学に憧れたことに始まり（恩師は川喜田二郎先生の門下であった）…転居先の隣人が三宅島出身のおじいちゃんであったり、部活の同回生の友人が三宅島在住であったり……今ここにこうしていることが、仕組まれていたかのように思われる沢山の偶然に出会い導かれて、ようやく京大での学びが生き、地理学教室にも顔向けできるようになったかな、と思う。憧れていた「住み込み調査」に、生涯臨んでいくつもりだ。

島に興味をもってくださった方、文化財保存や茅葺き古民家等にお詳しい方、そして美術が好きな方…ぜひ情報交換をさせていただきます、お願い申し上げます！

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

教育現場の変化とその対応 ～生徒のいない教室で思うこと～

浅野学園
煙山 哲史(2007年卒)

私は現在横浜にある中高一貫の私立男子校に勤務していますが、今は無人の教室で私一人、とても侘しい気持ちでビデオカメ

ラに向かって授業をしています。

奉職してからの 10 年余りで中学高校の現場もゆっくりと変革してきましたが、2020 年に入ってからの変化は凄まじいです。この原稿に四苦八苦している 2020 年 4 月現在、世界中で猛威を振るう新型コロナウイルスへの対策として本校でもオンライン授業が導入され、授業動画の配信や web 上での小テストを行っています。また今日は朝のホームルームをビデオ通話でクラス全員と挑戦してみました。今はとりあえずできることをやっていくしかないという思いがある一方、高三担任としては大学受験を意識せざるを得ず、入試改革への対応も協議している毎日です。今回は、今の中等教育の現場で私が直面していることを書かせていただきました。教育関係の方にとっては目新しい情報は少ないかと思いますが、ご容赦ください。

近年の変化として一つ強く感じることは、中高生の PC スキルの格差拡大です。スマートフォンの普及により家庭に PC がないケースが増加したり、あったとしても使用頻度が低かったりするので、タイピングスピードが極端に遅い生徒やエクセル処理が苦手な生徒が 4～5 年前から増えている印象があります。現在の高校生は最初にもった携帯電話が「ガラケーではなくスマホ」というものも多く、直感的に使用できるインターフェイスでないと作業できない生徒がいます。しかし、中には我々教員も舌を巻くような動画の作成能力や簡単なプログラミングであれば書ける力を持った生徒も沢山います。全般的には小学校時代か

ら発表形式には慣れているので、図表の作成や意見の集約、情報の収集を得意とする生徒は明らかに増えており、GISなどで作図させると面白い作品を提出してくれます。



浅野学園Facebookより引用

当然ですが、情報化の進展は生徒だけに影響するものでなく、教員側としても簡単に利用できるツールが劇的に増えました。生徒への配布プリントもカラー化され地形図学習しやすくなったことに加え、地理院地図で3D画像を作成して河岸段丘を確認したり、YouTubeの火砕流の動画を利用して防災学習を実施したりするのが容易になりました。他にもGoogle Earthの衛星写真

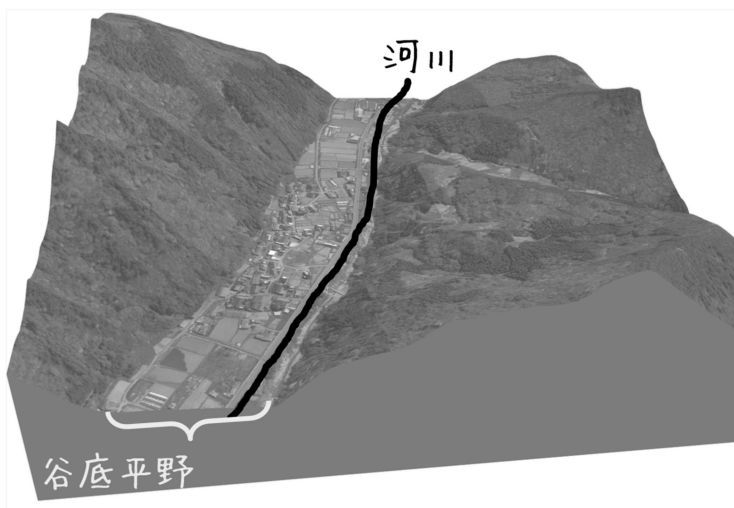
を用いた都市の街路網の類型化、風速を可視化するearthを用いた大気汚染状況の確認、QGISとアドレスマッチングサービスを用いたコンビニのドミナントエリアの確認ができる教材の作成など、例を挙げればきりがありません。

普段であれば週に18回程度授業を行い、そのたびに授業準備をするわけですが、生徒の興味を引き付ける資料をいかに素早くつくるのかというのは非常に重要な問題です。しかもちょうど今はオンライン授業を実施しているので、通常の授業よりも準備に時間がかかります。私も始めるまでは1回の録画を複数のクラスで再生するのでむしろ録画の方が楽なのではないかと考えていたのですが、5～6回同じ授業をするよりも1本の動画をつくるほうがよほど面倒です。（ちなみに現在の1回の授業に伴う作業は、光量や音声の機材チェックをし、撮影し、何度か撮り直し、編集して、配信し、課題の提出チェックを行い、動画を見ていない生徒へ見るように連絡を取るところまでです。）現状の私のスキルでは週に4～5本程度が限界です。今はとにかく手早く教材をつくりたいので、手軽に面白い図表を作成できるツールはとてもありがたいです。

また、オンライン授業を行う中で内容面での不安もありますが、この点に対してもこれらのツールは有用です。録画では授業の微細なニュアンスが伝わりにくい上に、生徒との質疑応答や生徒同士でのディスカッションが極めて少ないので、通常の授業に比べるとどうしても浅い内容に留まって

谷底平野

地理院地図より作成



3D画像を用いた授業料スライド

しまいます。(双方向での通信を用いた授業にすればよいではないかという指摘もありますが、各家庭の通信速度の差や端末の性能差が大きいために、数十名規模で双方向での通話を実施すると遅れが生じ、会話が噛み合わなくなります。) また本校では通常時は 50 分の授業が基本ですが、長時間端末を眺め続けると明らかに集中力が落ちることや、長い時間の動画だと生徒は倍速で再生してしまい記憶に残りにくいこともあり、オンラインでは 20~30 分程度に短縮しています。時間が短いことによりさらに授業内容が薄くなってしまう。そのような問題を解決するのもにもインパクトのあるビジュアル教材は極めて有効で、これらをさらに活用することで短時間の授業を少しでも濃い内容にする工夫ができるのではないかと試行錯誤しているところで

す。

しかし、ビジュアル的にわかりやすい資料を提示する上で困った問題も生じています。色の問題です。例えばカラーでわかりやすい地形図に生徒が慣れていき、モノクロの地形図が読めない、陰影がついていないと立体的にとらえられないなどというケースもあります。便利なものに慣れすぎるのも考え物かと思う時があります。

また色覚異常の生徒への配慮に多くの時間がかかるというのも大きな問題です。とくに本校は男子校でもあるので切実な問題なのですが、男子の 20 人に 1 人は色覚に異常を抱えるといわれます。これは 1 クラスに数人というレベルになってしまうので、色彩を確認するアプリなどを使い教材のチェックを行うようにしています。ただ、書籍や web 上のサービスからインパクト

のあるカラフルな地図や写真を引用すると、色覚異常の生徒には全く読み取りができない図であることもとても多く、苦慮しています。Web サービスが拡充してきているので、今後色調の変更が任意にできるようなものが増えていけばいいのになあ、とぼやきながらより良い図表やツールはないかと探し回っている日々です。

短時間の授業の中で高い学習効果をあげるために、今まで以上に一つ一つの教材を精査する必要がありますが今まで以上の労力がかかっていますが、本来は通常の授業の中でももっと洗練させることができたはずで、今のコロナ禍が今後どのような社会をつくっていくのか、はたまたこの談話会報が発行される頃には従来と同じ生活ができているのかわかりませんが、今回の大きな変動を見直すべきものを変えるチャンスにつなげていくこともできる気がしてなりません。本校の生徒は首都圏から離れることを嫌がるものも多く、未だ京大地理学教室に1名も卒業生を送り出していない自分の力不足を痛感している日々ですが、地理の楽しさを少しでも伝えられるように今日もビデオカメラの前に立ちたいと思います。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

秋季地理学談話会の報告

2019年11月9日、文学部新館の地理学実習室と地理学生研究室で、秋季地理学談話会を開催し、卒業生や在学生のみなさま

が参加されました。講演をしてくださった出田和久氏（1976年卒）や、OB交流会で講師を務めてくださった卒業生の方々に厚く御礼申し上げます。

OB交流会と講演会について、報告します。

<OB交流会>

卒業生の江崎洋平氏（香川県庁、2012年卒）と須藤梢氏（桑名市役所、2013年卒）のお二人が講師を務めてくださいました。在学当時の思い出や社会に出るまでの体験、社会に出てからの歩みなど、エピソードを交えながら、アドバイスだけでなく、温かい励ましの言葉もいただきました。活発な質疑や意見交換があり、楽しい交流の機会となりました。

講師の方々と司会者（土岐馨（D1）と亀山久瑠美（4回生））との間で打ち合わせして、進行内容も企画していただきました。ありがとうございました。



OB交流会の様子—江崎氏



*

OB交流会の様子—須藤氏

<講演会>

「定説・通説を考える

—近年の研究から—」

京都産業大学

出田 和久(1976年卒)

はじめに

私は、卒業後は高校の教師になろうと思っていたのですが、そのためには修士課程くらいは終えておいた方がよいと思い、進学しました。阪神間で育ったのですが、卒業論文は福岡平野をフィールドに弥生時代の集落立地について、修士論文は西海道の歴史地誌をまとめました。修士課程修了時が、ちょうど第2ベビーブーマーが18歳を迎える時期に当たり臨時に大学入学定員が増員され、思いもよらず1979年に大分大学教育学部の助手になり、今年でちょうど40年になります。

大分大学への赴任—地元地域の研究と共同研究への参画—

私は歴史地理を専門分野としていたのですが、大分大学教育学部の豊後水道沿岸地域の共同研究に加わり、地元の地域研究も行うようになりました。さらに、大分県立宇佐歴史民俗資料館（現、大分県立歴史博物館）での国東六郷を対象とした「国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査」の共同調査に加わりました。この最初の田染荘調査は後に荘園調査のモデルと高く評価され、日本史研究者に積極的なフィールドワークを促す契機となったと思います。調査は以後現在まで35年以上継続して行われ、フィールドは数年前から国東半島から中津平野に移っています。

上記の共同研究への参画は、農業地理や都市地理といった分野にも視野を広めることができ、野外実習の指導をはじめ教育を行う上で大いに役に立ちました。また、田染荘調査では村絵図と地籍図による景観復原を行い、その後の歴史地理研究の資料としての村絵図から国絵図の研究の契機となりました。さらに、土地台帳のデータベース化を試み、村落内の土地所有の階層性や地理的特徴の分析の基礎資料としましたが、現在のデータベースを活用した研究の起点となりました。

また、1986年に京都大学学術調査隊（隊長は建築史の西川幸治先生）の一員としてガンダーラ地方で最大級の仏教寺院「ラニ

ガト」の調査に参加した（写真1参照）ことは、日本の古代宮都を考える際に中国にとどまらずユーラシアの古代都市にも視野を広げる契機となりました。

このように私にとっては10年間の大分大学時代は、その後の研究の基礎を形成した時代となりました。



写真1 ラニガト遺跡（パキスタン）

ふたたび関西へ—大阪教育大学から奈良女子大学

国東半島地域での荘園村落調査では、地元にある資料館の強みを活かした調査、特にこれまで必ずしも十分ではなかった農業水利の調査を基礎に地域の開発史を考えることが必要であると考え、灌漑水利調査（実際の調査は資料館の学芸員が主に担当）も経験しました。1989年4月から大阪教育大学に勤務することとなると、小山靖憲先生（当時、和歌山大学）から泉佐野市史の編さんに誘われ、『絵図・地図編』と『灌漑水利編』の編纂を任されました。この時の調査は長期にわたりましたが、大阪教育大学、奈良女子大学のほか立命館大学や奈良大学の地理学科の学生や院生の方々にも

大変なご助力をいただきました。

また、絵図に関しては金田章裕先生から古代荘園図研究会に加えていただき、「水無瀬荘図」を担当しました。その後は「古代荘園絵図群による歴史景観の復元的研究」の科研（代表は佐藤信東大教授）の調査にも加えていただきました。これらの研究会では歴史地理の重要な資料である絵図について、日本史研究者の精緻な史料学的研究をはじめ多角的な視点からの研究に触



写真2 トプラクカラの都城遺跡（ウズベキスタン）

れることができ、『泉佐野市史 絵図・地図編』をまとめるうえでも大変良い勉強の機会となりました。

奈良女子大学では、地理教室の科研に参加し、タリム盆地やウズベキスタンの古代都城関連遺跡（写真2参照）を踏査する機会を得て、古代都城をユーラシアから捉える意義を再確認しました。

さらに奈良女子大学では、2004年に「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」（代表：舘野和己教授）がCOEに採択され、

そのメンバーとして古代都城の研究と古代都城揺籃の地である奈良盆地の古代とその前代の古墳時代についての歴史地理データの集積を担当し、GISの専門家とともに「奈良盆地歴史地理データベース」の構築にかりました。これがきっかけとなり、大和平野東南部に生まれたヤマト王権を象徴するといえる記念物が大型の前方後円墳であることに関心を持ち、前方後円墳の地域性を中心とする研究を始めました。

また、元入植者との出会いから開墾助成とそれによる開墾地移住に関心を持ち、九州での事例について調査、報告をしました。近代史における日本の食糧問題とも絡み、朝鮮半島や台湾といった植民地経営ともかわるもので、全国的視野からの研究の必要性を感じていますが、中途半端なまま今日に至っており、忸怩たる思いがあります。

なお、学会関係では人文地理学会や歴史地理学会、条里制・古代都市研究会などで各種委員あるいは評議員、事務局長、監査などを務めてきましたが、私個人としては

それぞれで得難い経験をさせてもらいました。

このように振り返ってみると、自ら積極的に意図して取り組んだ研究は少なく、折々に様々な人に導かれてそこに向かったことが多いことに気づかされ、自分が周りの人々にいかに恵まれ、幸運であったかを改めて強く思います。

以上、些か個人史の記述が長くなりましたが、ご海容のほどお願いいたします。

定説・通説を考える—近年の飛鳥・藤原京研究から—

定説・通説は、実は改めて考えてみると間違いのない真実であるとは、特に歴史に関しては言えないということに気が付きます。ここではその例として藤原京(図参照)を取り上げたいと思います。

藤原京遷都は694年(持統8年)であり、その範囲については、かつては一部に疑問を呈する向きもありましたが、岸俊男説の南北十二条、東西八条が定説のようになっていました。ところが、橿原市土橋遺跡と桜井市上之庄遺跡において、藤原京の西と東の端と考えられる道路が見つかり、これに代わって十条十坊説が教科書に紹介され現在定説化した感があります。しかし、その建設プロセスをめぐっては見解がいくつかありますが、藤原宮の位置は京の建設当初から決まっていたとする説が定説化しています。実は、このことはこれまでの発



講演会の様子—出田氏

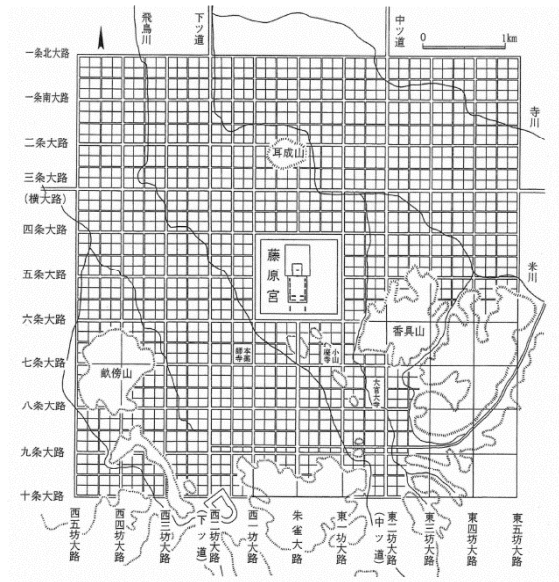


図 藤原京の復原 小澤毅『日本古代宮都構造の研究』
(一部の条坊は模式図, 条坊呼称は便宜的に平城京に准ずる)

表 飛鳥浄御原宮から平城宮の宮域等の面積概算

宮 名	東西	南北	宮域面積	宮殿域面積	官衙可能域面積
飛鳥浄御原宮	200～350m	800m	25ha (推定)	5ha	20ha
難波長柄豊碕宮	600m	600m	36ha (推定) *	15ha	21ha (推定) **
藤原宮	927m	907m	84.1ha	24.2ha	59.9ha

官衙可能域面積の算出は厳密には宮内道路等も除外しなければならないが、便宜的に宮域面積から宮殿部分の面積を減算した。藤原宮の規模は木下正史（2003）、平城宮は相原（2003）を参考にした。

*木下（2011）は46haとする。**木下（2011）は約28haとし、宮域の約60%を占めるとしている。

掘調査結果と照合すると理解し難いことです。なぜなら、宮建設予定地に条坊道路が早くから建設されていたり、天武9年(680)発願になる本薬師寺の伽藍が条坊道路と密接に関連したりしているからです。宮を建設することが分かっているのに、そこに側溝を備えた道路を敷設するだろうかとの疑問に思うのです。

ところで、「新城」から「京師」への呼称の変化は何を意味しているのでしょうか。「京師」とは都のことですから、この呼称が変わったことは「新城」を都にすることが予定されたことを示唆しているでしょう。それで天皇は都の予定地である「京師」の視察に赴いたのでしょう。

では、天武天皇が当初造ろうとした宮を

含まない「新城」とはどのようなものであったのかということが問題になるでしょう。飛鳥浄御原令の編纂を始め、律令国家へと国の機構を整備しようとした天武天皇は、官僚たちを集住させるには飛鳥の地は余りにも手狭であった（表参照）ために、その北の扇状地性の低平な地に管理に好都合な方形街区の都市空間を整備しようとして着手したのが「新城」であったと考えます。そして、飛鳥浄御原宮が宮としても狭く官衙機構をその内部に整備する余裕がないことが明らかとなり、「新城」に宮を設けて「みやこ」にすることを決めたことから「京師」と称されたというのが私の推定です。

最近は条坊道路についても色々と細かいことが明らかになってきており、たとえば西三坊々間路（十条十坊説では、西二坊々間東小路）の東側溝（SD152）の西肩に重複する溝（SD153）は、本薬師寺の寺域設定に伴って西三坊々間路（SF2740）が廃絶された後に開削され、中門の造営工事が開始される直前まで存続していたことがうかがえます。おそらく本薬師寺の草創から中門の建設に至るまでには一定の時間的経過があったものとみられるとされており、条坊施工から一定の時間の経過を想定するのが妥当とされるなど、条坊道路の敷設が「新城」建設段階においてある程度進んでいたことがうかがえます。左京十一条三坊（十条十坊説で八条二坊）で検出された大

規模建物群等の遺構のありようをみると、条坊街区に規制された区画内に正殿と東西脇殿が配され、先行条坊施工期に遡るといことが明らかとなりました。右京十一条四坊でも条坊に規制された区画と建物が検出され、左京六条三坊でも同様の状況が見られるという。また、藤原宮となる区域において宮内外で先行条坊以前の7世紀後半の掘立柱建物が検出されており、飛鳥の周辺に集住し始めた人々の居住区として形成されたとみられていることは、上記の推定とも整合的といえるでしょう。

このほか、平城京に関しても十条の存在をめぐる発掘成果から九条までとの理解に一石が投じられるなど、定説や通説への疑問が新たに提出されていますが、既に紙数が尽きてしまったので他日を期すことにしたいと思います。

おわりに

ここでは定説、通説に対して発掘成果から生まれた疑問に端を発した筆者の試考の一端を述べましたが、案外素朴な疑問が新たな発見や見解に発展する可能性を秘めているのではないかと思います。小さな疑問でも大事にして明らかにしていく作業はうまくいけば楽しいものですが、壁にあたることもあります。しかし辛抱強くその作業を積み重ねていくと、何とかブレークスルーできるときが必ず来ると思います。素朴な疑問も研究には必要だと少しでも思

ってもらえれば望外の喜びとするところです。

【付記】談話会で、地理との関わりを中心に、自分の歩みを振り返り、現在の関心を紹介せよとのことでしたので、前半は個人史めいて気恥ずかしいのですが、ご披露した次第です。ご寛恕いただければ幸甚です。また、拙文の性格上、参考文献等をあげませんでした。後半の内容に興味をお持ちの方は拙稿「飛鳥から藤原京へー宮から京への展開」（館野和己編『日本古代のみやこを探る』、勉誠出版、pp.47-72）をご参照いただければ幸いです。



懇親会にて

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

研究室便り

＜総合博物館での 地図資料等の利用について＞

総合博物館地理資料部門に収蔵されている地図資料等の閲覧・撮影などを希望される方は、他の文化史部門（日本史・考古学）

同様、お手数ですが、下記の窓口までご連絡のうえ、所定の手続きをお取りくださいますようお願いいたします。

京都大学総合博物館 事務室

電話：０７５－７５３－３２７２

※地図資料のうち、収蔵部局が不明なものについては、地理学共同研究室にお問い合わせください。

電話：０７５－７５３－２７９３

＜外国人研究者～滞在された方～＞

2019年3月15日～2020年3月9日の期間、尹波涛（イン・ボータオ）先生（陝西師範大学）が、招へい外国人学者として、教室に滞在されました。尹先生には、古代中国における少数民族のエスニック・アイデンティティーと祖先の記憶について、ご自身の研究を進められるかたわら、2019年7月9日には、「両晋時代の羯胡に関する新解釈」と題して講演をしていただきま



講演会の様子

した（於、地理学実習室）．学内外から大勢の方々が講演会と懇親会に参加してくださいました．



講演会後の懇親会

＜第八回東アジア人文研究 ワークショップの開催延期＞

2020 年 3 月，香港城市大学中文及歴史学系の主催で，第八回東アジア人文研究博士学生ワークショップが香港開催される予定でしたが，不安定な香港情勢のため，2019 年末，開催地が上海の復旦大学文史研究院に変更となりました．ところが，中国国内での新型コロナウイルスの急速な感染拡大により，2020 年 2 月上旬，開催延期が決定しました．ワークショップへの参加が決まっていた地理学専修の院生（朝倉慎人，谷本涼，堀川泉，土岐馨 4 名）は，歴史に記録されるような 2 つの出来事の影響を体験することになりました．

今後の予定は，時期も開催地もまだ決まっていません．

＜画像アーカイブの公開 ～古地図と中国風俗人形～＞

2020 年 1 月 28 日，京都大学貴重資料アーカイブに地理学教室所蔵の古地図 3 点の画像データが公開されました（下記参照）．

- ・混弌疆理歴代國都之圖
- ・[甘肅伊犁圖]
- ・伊犁圖

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/news/2020-01-27-0>

また，2020 年 4 月 13 日，大正年間に地理学教室で購入した中国農村模型（風俗人形など）の画像データベース（3D モデルを含む）を公開することができました（日本語，繁体中文，English に切り替え可）．

公開までの作業には，地理学教室に滞在中だった尹波涛（イン・ボータオ）先生（陝西師範大学）からもご協力いただくことができました．

京都大学所蔵の中国風俗人形コレクション
<https://openconciiergeorg.github.io/chineseDolls/ja/top.html>

3D モデルはマウスで動かしますので，お試し下さい．

＜地理学教室への寄贈図書 ～2019年度～＞

昨年度、地理学教室にご寄贈いただいた図書、雑誌等の一覧です。寄贈していただきました方々に厚く御礼申し上げます。これらの図書は、文学研究科図書館または地理学生共同研究室に配置し、学生ならびにスタッフの研究・教育に活用させていただいております。卒業生の皆様にもご利用いただけますので、どうぞご活用ください。

(図書)

- ・朽木谷の自然と社会の変容／海青社
- ・近世城下絵図の景観分析・GIS分析／古今書院
- ・歴史地理学の散歩道／ナカニシヤ出版
- ・自然環境保全のための保全砂防学入門／電気書院
- ・日本・アジアにおける地域の構造と開発／古今書院
- ・豆州志稿／羽衣出版
- ・図説集落：その空間と計画／都市文化社
- ・Osaka Metro 開業1年 大阪市営交通114年の軌跡／天理大学附属天理参考館
- ・樹木年輪と古代の気候変動／大阪府立狭山池博物館
- ・中国の市 発展史・地域差・実態／ナカニシヤ出版
- ・21世紀の砺波平野と黒部川扇状地／桂書房
- ・Shimadas：シマダス：日本の島ガイド／日本離島センター

- ・歌がつむぐ日本の地図：歌謡曲・童謡・唱歌・民謡・J-POP／帝国書院
- ・出羽三山：山岳信仰の歴史を歩く／岩波書店
- ・森と火の環境史 一近世・近代日本の焼畑と植生／思文閣出版
- ・奈良・大和を愛したあなたへ／東方出版
- ・墨是可新話／現代出版社
- ・江戸城三十六見附繪圖集成／新人物往来社
- ・四国遍路の古地図／徳島：出版
- ・日本の地下水政策：地下水ガバナンスの実現に向けて／京都大学学術出版会
- ・Stieler's hand-atlas 84 karten / J. Perthes
- ・MATERIALITY, PEOPLE'S EXPERIENCE AND MAKING GEOGRAPHICAL KNOWLEDGE / Kyushu University
- ・조선향토대백과／평화문제연구소
- ・徽州地區簡志／黃山書社
- ・績溪縣志／黃山書社
- ・歙縣志／中華書局
- ・屯溪市志／安徽教育出版社
- ・休寧縣志／安徽教育出版社
- ・黟縣志／光明日報出版社
- ・祁門縣志／安徽人民出版社
- ・武夷山市志／中国統計出版社
- ・石台縣志／黃山書社
- ・建德縣志／浙江人民出版社
- ・旌德縣志／黃山書社
- ・婺源縣志／檔案出版社
- ・臺灣桃園農田水利會百年誌／臺灣桃園農田水利會

(雑誌)

- ・茨城地理 第20号 (茨城地理学会)
- ・エネルギー史研究 no.34 (九州大学記録資料)

- 館)
- ・ えりあぐんま 第 25 号 (群馬地理学会)
- ・ 大阪府立狭山池博物館研究報告 10
- ・ お茶の水地理 第 58 号
- ・ 関西学院史学 第 47 号
- ・ 観光科学研究 第 12 号 (首都大学東京都市環境科学研究科)
- ・ 京都外国語大学ラテンアメリカ研究所紀要 No.18
- ・ 京都府漁協だより 第 24 ～ 28 号 (京都府漁業協同組合)
- ・ 空間・社会・地理思想 第 23 号
- ・ 経済地理学年報 Vol.65, No.1
- ・ 駒澤地理 第 55 号
- ・ 国土館大学地理学報告 no.27 (国土館大学地理学会)
- ・ ジオグラフィカ千里 第 1 号 (千里地理学会)
- ・ しま no. 258 ～ 261 (財団法人日本離島センター)
- ・ 人文学部紀要 第 40 号 (神戸学院大学人文学部)
- ・ 人文地理 71(1)
- ・ 石炭研究資料叢書 no.40 (九州大学記録資料館)
- ・ 地域学研究 第 32～33 号 (駒澤大学応用地理研究所)
- ・ 地域研究 vol. 59 (立正地理学会)
- ・ 地域研究年報 41 (筑波大学人文地理学・地誌学研究会)
- ・ 地域と環境 No. 15 (京都大学大学院人間・環境学研究科)
- ・ 地域と社会 第 22 号 (大阪商業大学比較地域研究所)
- ・ 地學雜誌 vol. 128,no. 2 ～ 6, Vol. 129, no. 1
- ・ 地図情報 vol.39, no. 1 ～ 4
- ・ 地理 vol. 64 (5 ～ 12 月号), vol. 65 (1 ～ 4 月号)
- ・ 地理学研究 第 47 号 (駒澤大学大学院地理学研究会)
- ・ 地理学報告 第 121 号 (愛知教育大学地理学会)
- ・ 地理学評論 vol. 92,no.3 ～ 6, vol. 93, no. 1 ～ 2
- ・ 地理研究 27 号 (法政大学大学院)
- ・ 地理誌叢 第 60 巻 第 1・2 号(合併号) (日本大学地理学会)
- ・ 地理歴史人類学論集 8 号 (琉球大学法文学部人間科学紀要別冊)
- ・ 東北学院大学論集 歴史と文化 第 59 ～ 60 号
- ・ 東北文化研究所紀要 第 51 号
- ・ 砺波散村地域研究所研究紀要 第 36 号
- ・ 苗場山麓ゾナーク 研究集録 第 1 号 (苗場山麓ゾナーク振興協議会)
- ・ 奈良大地理 第 24 ～ 25 号 (奈良大学地理学会)
- ・ 人間文化 H&S 45 ～ 46 (神戸学院大学人文学会)
- ・ 広島大学現代インド研究 空間と社会 Vol.10
- ・ 文化史學 第 75 号 (同志社大学・文化史学会)
- ・ 法政地理 第 51 ～ 52 号
- ・ 立命館地理学 31
- ・ 理論地理学ノート No.20 ～ 21 (首都大学東京)
- ・ 歴史学の最前線 Vol.20 ～ 21 (国立歴史民俗博物館)
- ・ 歴史人類 第 47 号 (筑波大学大学院人文社会科学研究科)
- ・ 歴史地理学野外研究 第 19 号 (筑波大学人文社会科学研究科)
- ・ 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊第 27 号-1 ～ 2
- ・ 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 no. 30

- ・ *AFRICAN STUDY MONOGRAPHS* Vol.40
No.1 ～ 2&3, 4
- ・ *AFRICAN STUDY MONOGRAPHS*
Supplementary Issue no. 58 ～ 60
- ・ *ASIAN AND AFRICAN AREA STUDIES*
no. 18-1, 2
- ・ *IATSS Review* vol. 44, no. 1 ～ 4 (国際交通安全
学会誌)
- ・ *Japanese Journal of Southeast Asian Studies* 東
南アジア研究 vol. 57, no. 1 ～ 2
- ・ *SOUTHEAST ASIAN STUDIES* vol. 8, no. 1 ～ 3

(報告書)

- ・ 岩橋教章・章山に関する総合的研究／神奈川県
立歴史博物館
- ・ 京都中川の北山林業景観調査報告書／奈良文化
財研究所文化遺産部景観研究室
- ・ 山口弥一郎旧蔵資料調査報告書／福島県立博物
館
- ・ 漢江流域における「水環境」史関連史跡等踏査
資料集(稿)／(H.22-24 年度)科研費報告書
- ・ 地図印刷技術者岩橋章山の思想と台湾での動向
に関する基礎的研究／(H.30 年度) 科研費
報告書
- ・ 地域居住区空間の三次元アーカイブスの利活用
／国土技術政策総合研究所研究報告, No. 62
- ・ 国土交通省版・景観シミュレーション・システ
ム Ver.2.09 のアーキテクチャ／国土技術政策総
合研究所研究報告, No. 42
- ・ 富山県高岡市の地理 地理学実習報告書(43)／
関西大学地理学・地域環境学教室
- ・ 2018 年度地域調査実習報告書「静岡」／金沢
大学人文学類地理学教室
- ・ 実習報告書 島原市 2019 年年度／京都大学

文学部地理学教室

- ・ 熊本大学地理学研究 第 8 号 大分県豊後高田
地域調査報告／熊本大学文学部地理学研究室
- ・ *ANNUAL REPORT OF THE MURATA SCIENCE*
FOUNDATION No.33

(その他)

- ・ 空中写真(京都中心部) 国土地理院令和元年 8
月撮影 [1:100,000]／「地図展 2019 近代京
都 150 年を俯瞰する」
- ・ 大正天皇御大礼記念 1 万分の 1 地形図(京都中
心部) 陸地測量部大正 4 年 10 月 10 日発行[1:
100,000]／「地図展 2019 近代京都 150 年を俯
瞰する」
- ・ 昭和天皇御大礼記念 1 万分の 1 地形図(京都中
心部) 大日本帝国陸地測量部昭和 3 年 9 月 10
日発行[1:100,000]／「地図展 2019 近代京都
150 年を俯瞰する」

＜研究室の動静＞

研究室の事務は、引き続き三上純子さん
にお願いしております。

本年度は、大学院博士後期課程 6 名、修
士課程 8 名、学部 4 回生 15 名、3 回生 15
名が在籍しています。

＜新メンバーの自己紹介＞

本年度は、新たな顔ぶれとして、3 回生
15 名と修士課程 1 回生 1 名を迎えました。
簡単に自己紹介していただきます。

(3回生)

石川 聡一郎 (いしかわ そういちろう)
こんにちは。石川聡一郎です。出身は宮崎県日向市で、幼少期は神話のふるさと高千穂町にも住んでいました。美味しい食べ物とそれに育まれた優しい人が魅力的な街なので、是非いらしてください。地理学専修に進んで、人文地理系の研究をしようと思っています。趣味はスポーツと読書と音楽を聴くこと、サイクリングです。よろしくお願いします。

磯邊 穰 (いそべ ゆたか)

新3回生の磯邊穰です。音楽が好きで、所属している軽音サークルではベースを担当しています。地理学教室のみなさんと学ぶのはもちろん、いろいろなお話をすることを楽しみにしています。よろしくお願いします！

稲田 知希 (いなだ ともき)

埼玉出身の稲田知希と申します。日本国内を公共交通で巡り、気分に散策することが趣味で、いずれは世界にも活動を広げたいと考えております。また、マラソンサークルに入っており、年に3回ほど地方都市のマラソン大会に出場しています。よろしくお願い致します。

栽松 映里 (うえまつ えり)

初めまして。三回生の栽松映里と申します。和歌山県出身です。ボート部のスタッフをしており、大会運営のお手伝いなどをしています。私は中学生のころから地理の授業

が大好きで、特に地図を眺めるのが好きでした。まさか専攻にするとは思っていませんでしたが、今はとても楽しみです。よろしくお願いします。

大柳 真子 (おおやなぎ まこ)

3回生の大柳真子です。大阪府出身です。趣味はカフェ巡りで、大学在学中に京都のカフェをたくさんまわろうと思っています。高校時代から地理が好きで、大学でも地理学を学ぶために地理学専修にしました。よろしくお願いします。

清池 祥野 (きよいけ よしの)

文学部3回生の清池祥野です。愛媛の田舎から京都に出てきてもう2年も経ってしまいました。今では方言も薄れ、すっかり都会の人に成り果てています。入学当初から地理学教室に入りたいと思っていたので、これからは一層頑張っていこうと思います。よろしくお願いします。

倉田 瑞希 (くらた みずき)

文学部新3回生の倉田瑞希です。chotbetterというフリーペーパーサークルとかもかもというランニングサークルに入っています。趣味はカフェと麻雀です。よろしくお願いします！

小池 野々香 (こいけ ののか)

3回生の小池野々香と申します。神奈川県横浜市の左上出身です。幼少期に親しんだ近所の田園風景が開発されていく過程を見

ました。クラリネットとジブリが好きで、最近はおもひでぼろぼろが好きです。どうぞよろしくお願いします。

坂口 綺那（さかぐち あやな）

初めまして。新3回生の坂口綺那です。下宿を始めて3年目、京都は魅力的な街だなあと 생각합니다。寺社仏閣が町中に溶け込み、鴨川や大文字山など自然が近くにあって、歩く度に発見が。大学在籍中に、京都に限らず少しでも多くの土地を訪問できたらいいなと思っています。これからどうぞよろしくお願いします。

鈴木 洋太郎（すずき ようたろう）

今年度より地理学専修でお世話になります、鈴木洋太郎と申します。東京都立日比谷高校の出身で、大学では陸上競技部に所属しています。高校生の頃に、京大の地理学教室で学びたいと思い、京大を志望したので、ここで学べることを嬉しく思います。よろしくお願いします。

高比良 睦（たかひら むつ）

3回生の高比良睦（ちか）です。日本史や古典が好きで文学部に入りましたが、色々な分野とあわせて学べる地理学に興味を持ちました。京都に憧れて来たので、大学生の間にたくさん出かけて、京都に詳しくなりたいと思っています。

田中 豪（たなか ごう）

初めまして、新3回生の田中豪です。景観や自然環境、道路交通について勉強し、自

然環境と生活圏の関わり・心的景観の形成について知見を深めていきたいと思っています。GIS など地理学× IT についても興味があります！楽しみながらでもとことん学びを深めていきたいと思っています。よろしくお願いします。

谷野 里空（たにの りくう）

こんにちは、谷野里空です。出身は札幌で、趣味は音楽鑑賞、釣り、野球観戦、ネットラジオ鑑賞です。1回生の時に受けた講義での水野先生の話がきっかけで地理学専修を選びました。山岳部に入っていましたが、去年度で退部し、この前期は休学しています。よろしくお願いします。

土山 悠太郎（つちやま ゆうたろう）

休学中

山下 萌登（やました もえと）

愛知県豊川市から来ました3回生の山下萌登です。合唱団と考古学のサークルに所属しています。最後の晚餐は味噌煮込みうどんにしたいと思っています。地元はバラの生産量が日本一だそうです。（地元の宣伝でした！）

（修士課程）

柴田 将吾（しばた しょうご）

和歌山大学教育学部から参りました大学院1回生の柴田将吾です。大阪府富田林市出身で近世の遊学を研究しています。歴史地理学のほかに、観光地理学や文化地理学に興味があります。趣味は史跡・博物館巡り

です。地理学専修でさらに学びを深めたい
と思います。よろしくお願いします。

〈2018年度の実習旅行〉

2019年度は、10月28日から31日まで、
島原市において、2回生・3回生計16名
が調査を行い、報告書を作成しました。



「幸せの黄色いハンカチ」が潮風になびく
島原鉄道大三東駅。(撮影：稲田知希)

〈学部卒業生・院生の進路〉

(学部卒業生)

東 大貴	読売新聞大阪本社
大友 葵	free (株)
塩崎 皆人	文学研究科 (修士課程)
深谷 一帆	
伊野部稔隆	デンロコーポレーション
岩松 佳那	日本たばこ産業 (株) 中央研究所
上中健士朗	北海道旅客鉄道 (JR 北海道)
大垣美哉子	日本総合システム

海田麻友子	NTT ドコモ (docomo)
角谷 優馬	文学研究科 (修士課程)
亀山久瑠美	東日本高速道路株式会社
郷田 希	神戸製鋼所
近藤 悠人	株式会社日立製作所
榊原 尚弥	株式会社ジェーシービー
高橋 徹大	日本オーチス・エレベータ (株)
中原 大介	福井県庁
布浦 康平	株式会社 小松製作所
三谷 圭	九州旅客鉄道株式会社
山口真理子	中日本高速道路株式会社
若林 良輔	文学研究科 (修士課程)

(修士課程修了生)

雨宮いほ乃	ジェイエムシー (株)
正垣 萌生	滋賀県庁

(博士後期課程修了生)

朝倉 慎人	京都大学文学研究科 (非常勤講師)
芝田 篤紀	京都大学フィールド科学教育 研究センター森里海連環学教 育研究ユニット (研究員)
大谷 侑也	サントリーグローバル イノベーションセンター (株) 水科学研究所
谷本 涼	日本学術振興会 (特別研究員) (東北大学)

〈院生の研究状況の報告〉

2019年度までの院生の研究状況を報告
します。以下は、査読を経た論文のリスト
です。

D 2 岡田 眞太郎

- ・指定管理者制度の活用からみた NPO 法人の持続可能性—京都府を事例に一，人文地理，68-3，355-373（2016）.

D 1 金 玆熙

- ・KIM Da Bin, KOO Kyung, KIM Hyun Hee, HWANG Ga Young, and KONG Woo Seok, Reconstruction of the habitat range suitable for long-tailed goral (Naemorhedus caudatus) using fossils from the Paleolithic sites. *Quaternary International* 519, 2019, pp.101-112.
- ・김현희(金玆熙)·김다빈·水野一晴·공우석, ‘서울시 여름철 불쾌지수의 시공간적 특성(ソウル市夏季不快指数の時空間的特性)’，*Journal of Climate Change Research* 10 (3), 2019, pp.173-184.
- ・김현희·김다빈·송현호·황가영·공우석, ‘한반도 최외곽 도서들의 식물지리적 특성’ (韓半島最外郭島嶼にみる植物地理的特性)，*대한지리학회지* (大韓地理学会誌) 53 (2), 2018, 117-132.
- ・공우석·김건욱·이슬기·박희나·김현희(金玆熙)·김다빈, ‘설악산, 지리산, 한라산 산정부의 식생과 경관 특성’ (雪岳山・智異山・漢拏山山頂部の植生と景觀特性)，*Journal of Climate Change Research* 8(4), 2017, 401-414.
- ・김현희(金玆熙)·김다빈·전철현·김찬수·공우석, ‘전라남도 도서지역 귀화식물의 도서생물지리적 특성’ (全羅南道島嶼地域帰化植物の島嶼生物地理学的特性)，*환경영향평가*(環境影響評価) 26(4), 2017, 272-289

- ・Hyun Hee Kim, Young Wook Ko, Kwon Mo Yang, Gunhee Sung and Jeong Ha Kim, Effects of disturbance timing on community recovery in an intertidal habitat of a Korean rocky shore. *Algae* 32 (4), 2017, pp.325-336.

- ・김현희(金玆熙)·김다빈·원현규·김찬수·공우석, ‘전라남도 남해안 도서식물상의 도서생물 지리학적 특성’ (全羅南道南海岸の島嶼植物にみる島嶼生物地理学的特性)，*Journal of Climate Change Research* 7(2), 2016, 143-155.

〈学位の取得～2019年度年度～〉

2019 年度に学位を取得された方のお名前と論文題目は，下記のとおりです．

＊課程博士

- 大谷 侑也：アフリカ熱帯高山の氷河縮小が周辺水環境に与える影響の解明—水の安定同位体を利用して—
- 芝田 篤紀：地域特有の自然環境と住民生活の有機的關係—生業活動の持続可能性に着目して—
- 谷本 涼：少子高齢社会におけるアクセシビリティ問題に関する地理学的研究—大阪大都市圏を中心に—

＜2020年度 講義題目＞

＊講義（系共通科目）＊

水野一晴・米家泰作 地理学概説

＊特殊講義＊

教授 水野一晴 世界の自然環境と人々の生活や社会 1（前）／世界の自然環境と人々の生活や社会 2（後）

准教授 米家泰作 山と森の歴史地理（前）／帝国日本と地理的知（後）

客員教授 埴淵 知哉
地図表現の探求（後）

人環教授 小方登 地理情報・衛星画像の処理・分析の基礎（前）

人環教授 小島泰雄
中国農村の生活空間（前）

地球環境学舎教授 山村亜希 戦国・近世都市を読む・歩く（前）

防災研准教授 松四雄騎 湿潤変動帯の自然地理学とその応用としての斜面減災論（前期・集中）

アジア・アフリカ地域研究研究科 大山修一
アフリカの自然と文化，社会に関する地理学（前）

講師 中辻 享 東南アジア焼畑社会の政治生態学（前）／東南アジアへの歴史地理学的アプローチ（後）

講師 伊藤千尋
都市と農村の地理学（前期・集中）

講師 藤本 潔 地形・生態系と人間活動（後期・集中）

＊演習 I A

—地理学研究法 1A—（前期）

田中和子・水野一晴・米家泰作

＊演習 I B

—地理学研究法 1B—（後期）

田中和子・水野一晴・米家泰作

＊演習 II A

—4回生演習 1A—（前期）

田中和子・水野一晴・米家泰作

＊演習 II B

—4回生演習 1B—（前期）

田中和子・水野一晴・米家泰作

地球環境学舎教授 山村亜希 信長の地理を読む（後期）

＊講読＊

教授 田中和子 Reading English Materials on Geography I（前）／Reading English Materials on Geography II（後）

教授 田中和子 Reading German Materials on Geography（通年）

白眉センター准教授 田中祐理子 フランス地理書講読（前）（後）

人文科学研究所助教 宮紀子 中国地理書講読（前）（後）

＊地理学実習（通年）＊

水野一晴・米家泰作

＊大学院演習―地域の諸問題―（通年）＊

田中和子・水野一晴・米家泰作

＊大学院演習

人環教授 小島泰雄 グローバル化における地域（後期）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

事務局から

<地理学談話会2019年度会計報告>

（2019年4月1日～2020年3月31日）

【資金会計】

<収入>

年会費	121,500
寄附金	0
利子	0
前年度繰越金	72,324
計	193,824

<支出>

運営への振替	138,743
郵便振替手数料	10,683
次年度への繰越	44,398
計	193,824

【運営会計】

<収入>

資金会計からの振替	138,743
秋季懇親会会費	52,000
春季懇親会会費	121,600
計	312,343

<支出>

秋季懇親会	39,169
講師3名交通費	36,000
OB交流会経費	0
春期論文発表会経費	121,600
会報・名簿等印刷費	14,000
会報製本費用	0
通信・文具等費	101,574
弔電・供花等	0
計	312,343

<訃報>

前回の会報発行以降、次の方々がお亡くなりになりました（お亡くなりになったとお知らせをいただいた方を含みます）。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（確認分、（）内は卒業年、敬称略）

鎌尾 利博 （1980卒）
春日 茂男 （1945. 9卒）
石田 寛 （1942. 9卒）

<住所不明者についてお願い>

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は、談話会事務局までご一報ください。

（数字は卒業年、敬称略）

安福 伸光 （1997卒）
李 禧淑 （2001博）
池内 麟太郎 （73卒）
石角 強 （1970卒）

石田 陽介	(2002 卒)	木村 洋之介	(1949 卒)
石橋 弘嗣	(2006 卒)	木村 理恵	(2002 卒)
石原 大嗣	(1997 卒)	久保田 彰	(2013 卒)
石原(林) 美歩	(1995 卒)	坂部 誠治	(1991 卒)
石村 裕輔	(1992 卒)	島崎 郁司	(1996 卒)
伊藤(渡邊)陽子	(2005 卒)	嶋野 浩一朗	(1997 卒)
井上 一男	(1955 卒)	清水 究吾	(1098 卒)
井上 喜徳	(1998 卒)	新谷 泰久	(1990 卒)
今井 平八	(1944 卒)	鈴木 伸国	(1988 卒)
岩部 敏夫	(1991 卒)	田島 渡	(1948 選)
上田 直人	(2009 卒)	田辺 賢一郎	(1949 卒)
上村 謙介	(1998 卒)	田村 麗花	(2014 卒)
内山 隆之	(1987 卒)	都子 屋	(1940 委)
江崎 健治	(1992 卒)	津田 朋一	(1996 卒)
遠藤 元	(1996 卒)	厩田 剛	(2014 卒)
遠藤 正雄	(1978 卒)	長尾 拓磨	(2013 卒)
大島 健司	(1992 卒)	中筋 護	(1977 卒)
太田 隆文	(1997 卒)	中山 耕至	(1993 卒)
大野 宏	(1992 卒)	那須 久代	(1988 卒)
大山 晃司	(1995 卒)	檜崎(藤川)こず恵	(1998 卒)
岡本 靖一	(1967 卒)	南部 一寿	(1999 卒)
岡本 美津子	(1987 卒)	西井(小林)理子	(2002 卒)
興津 俊之	(1991 卒)	西尾 正隆	(1970 卒)
小口 稔	(1991 卒)	西澤 仁晴	(1974 卒)
楓 雅之 (泰昌)	(1945 卒)	西山 隆彦	(1995 卒)
片寄弘也	(2004 卒)	能勢(朝倉)正寛	(1962 卒)
勝村(赤座)眞知子	(1973 卒)	野瀬 美咲	(2010 卒)
叶谷 房子	(1998 卒)	林(東) 洋子	(1965 卒)
川合 大地	(1998 卒)	原 健太	(2003 卒)
川添 和明	(1995 卒)	原 潤	(1997 卒)
貴志 謙介	(1981 卒)	平井 素子	(1996 卒)
木地 節郎	(1949 卒)	福田 新一	(1971 卒)
北口 卓美	(1990 卒)	古川 昇平	(2006 卒)
木村 宏	(1949 卒)	前田 奈実	(1999 卒)

松井 威	(2001 卒)
松本 弘史	(1983 卒)
御手洗 央治	(1993 卒)
宮澤 博久	(2005 卒)
宮原 耕一	(1994 卒)
村角 浩明	(2006 卒)
野城 千穂	(2017 卒)
保江 志帆	(2003 卒)
山口 一郎	(1980 卒)
山口 秀樹	(1997 卒)
山下 良	(1989 卒)
山田 潤哉	(1997 卒)
山田(児玉)憲子	(1970 卒)
山田 浩子	(2000 卒)
山中 一高	(1991 卒)
吉岡 朝日	(2003 卒)
吉野 修司	(1995 卒)
吉村 健志	(2002 卒)
六嶋 美也子	(1993 卒)
渡邊 克己	(2004 卒)

＜オープンキャンパス：2019年度の 報告と2020年度のお知らせ＞

2019 年 8 月に京都大学のオープンキャンパスが開催されました。文学部の見学・説明会もこの一環として、9 日に行われました。文学部の全体説明の後、地理学を希望する高校生のみなさんには、地理学専修の見学や在学生たちとの懇談を楽しんでいただきました。

2020 年度の京都大学主催のオープンキャンパスの開催予定については、
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/>
をご覧ください。(詳細未定)

＜2020年度秋季地理学談話会 について＞

本年は、新型コロナウイルスの流行により、まだ計画を詰めておりません。決まり次第、お知らせいたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

＜地理学談話会『会報』バックナンバーのリポジトリ掲載に関する お知らせとお願い＞

地理学談話会では、学術論文のデータベース化やインターネット上での公開の流れを踏まえた京都大学附属図書館学術支援課学術支援掛からの要請を受け、地理学談話会が発行する『会報』のバックナンバーを、2020年11月1日より京都大学学術情報リポジトリ(KURENAI)を通して電子ジャーナルとして公開することにいたします。

『会報』バックナンバーの電子リポジトリへの掲載を進めるためには、『会報』に掲載された記事をインターネット上に公開するための著作権について、地理学談話会が著作権者から譲渡ないし許諾を受けていることが必要になります。地理学談話会と

いたしましては、すべての記事等の著作権者に、著作権法第21条～第28条（第21条は複製権、第23条は公衆送信権、第27条は翻訳・翻案権に関する規定です）に定められた権利を当会に委譲することに同意いただきたく存じます。

詳細につきましては、「地理学談話会『会報』バックナンバーのリポジトリ掲載に関するお知らせとお願い」を同封しておりますので、どうぞご覧下さい。

会員各位におかれましては、電子ジャーナルとしての『会報』の公開について、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

☆☆☆

一年あたり千円を目処として、それぞれの会員の方々に、談話会の運営経費へのご協力をお願いしております。随時、ご支援をお願いいたします。納入の際は、同封しております「郵便振替用紙」をご利用ください。

郵便振替：01080－4－21457

地理学談話会

また、

銀行振り込みも可能ですので、下記の口座にお願いいたします。

みずほ銀行 出町支店（普）

1143293 チリガク ダンワカイ

（チリガクとダンワカイの間にスペース有り）

☆☆☆

昨今の諸経費（印刷費、講師への交通費（秋季談話会）、送料、手数料など）の大幅な値上がりにより、談話会の運営経費がたいへん逼迫しております。来年には、『談話会名簿』の改訂（5年ごと）を予定しており、やりくりに苦慮しております。

会員の皆様には、まとめ払い等の手立てもご検討いただけましたら、幸いに存じます。教室にお立ち寄りの際に、ご持参くださるのも大歓迎です。

京都大学文学部地理学教室談話会 会報 第 31 号

発行日 2020 年 5 月 15 日

発行者 地理学談話会

〒 606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 地理学教室内

TEL : 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

URL http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/geo-top_page/